慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国における全体主義的政権の形成と中国民主同盟 : 一九四九年～一九五三年
Sub Title	China Democratic League and the formation of a totalitarian government in China, 1949-1953
Author	蒲, 柢華(Pu, Dihua)
Publisher	慶應義塾大学大学院法学研究科内『法学政治学論究』刊行会
Publication year	2023
Jtitle	法學政治學論究 : 法律・政治・社会 (Hogaku seijigaku ronkyu : Journal of law and political studies). No.137 (2023. 6) ,p.425- 471
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10086101-20230615-0425

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国における全体主義的政権の形成と中国民主同盟
——一九四九年～一九五三年——

蒲　　栃　　華

一　序　章
(一)　問題の所在
(二)　先行研究
二　民盟の肖像——その前近代性について
(一)　人的側面：派閥主義
(二)　政党組織の側面：緩い集合体
(三)　中国共産党との関係：従属と独立のバランス
三　知識分子改造運動——共謀および矛盾
四　反右派闘争の前奏——一九五三年の異変
五　終　章

一　序　章

㈠　問題の所在

中国民主同盟（以下、民盟と略記）は、元来は中国で中国国民党（以下、国民党と略記）、中国共産党（以下、中共と略記）に対抗するために結成された第三勢力による政治団体である。第三党、中国青年党、国家社会党、救国会派、職業教育派、郷村建設派の三党三派によって構成された。これらの勢力に集う人々は一九四一年、国民党と中共の対立激化による民族の危機と、彼らに加えられる国民党の弾圧に対処し、団結するため、重慶に中国民主政団同盟を組織した。一九四四年九月に、中国民主政団同盟を母体に民盟が結成された。一九四六年一月、国民党と中共および民盟の対立が激化し、国民党の民盟に対する暴力行為、脅迫事件が相次ぎ、ついには不法にも武力をもって民盟の施設を閉鎖するに至った。こうして民盟は必然的に中共と密接に提携し、国民党支配地区の地下工作を担当し、国民党の台湾追放に貢献した。一九四九年九月、中華人民共和国が成立すると、民盟主席である張瀾は国家副主席となり、また多くの有力幹部は、その功績を評価され政務院の部長、中央政府各種委員などの要職に推挙された。初期から文化・教育分野の知識人を中心に構成され、現在は中国最大の衛星政党となった(1)。

建国以前の時期（一九四一年から一九四九年）における民盟の歴史的役割とその限界性は、すでに平野正によって検討されている(2)。平野の研究は、中国政党史の補完に大きく貢献した。それでも、「建国以後」の民盟はいかなる政党なのか、という問題は残る。しかしその問題以前に、一九四九年以後の中国の民主党派に注目する歴史的価値が存在するのかという問題が提起されるであろうことは、容易に想定できる。それは、各民主党派が建国に伴って自動的に

衛星政党になってしまったという先入観に由来すると考えられる。このような見方は、共和国の政治史を一九四九年以後の中共史と同一視する思考に依拠するものである。ここでこうした指摘に対する反論として、平野の見解を引用しておく。

> 「指導権」の承認ということと、「指導」の承認とは厳格に区別されねばならぬ問題である。というのは「指導」というのは政治的・組織的「指導」であって、実際には「支配」に外ならないのである。それは民主党派の独自性も独立性も認めるものではなく、中共の意志をこれらの党派に押し付けることを内容とするものであるからである。……
>
> 一方、「指導権」の承認とは政治的方向性の承認であり、それはあくまでも政治的に正しい内容の方針の提示が前提となる。もしその方針が誤っていたとするならば、その誤りを指摘しその誤りを克服するよう働きかける自由を有するものでなければならない。この場合は民主党派はあくまでも政治的にも組織的にも独立自主の立場に立つことが前提となり、自らの判断で行動することが前提となっているのである。その場合は中共との関係は対等平等である。(3)

以上の言葉はまさに今日の民盟と建国初期の民盟との比較を念頭において論じられたものである。前者は「指導」を承認しているのに対し、後者は単に「指導権」を承認したものであると平野は区別している。一九五〇年代の民盟は組織力をはじめとして中共と比べものにならないが、その政治的発言力を無視することはできない。後述するように、民盟は政党として中共への従属が顕著であったにもかかわらず、非常に微妙な距離感を保ちながら、主体性を持つ政治集団として時に翼賛を示し、時に沈黙し、またある時は独自の政治的志向を表出していた。民盟の歴史を語らない限り、共和国の政治史の全体像を摑むことができず、中国の知識人の政治的生態を適切に描くこともできない。換言すれば、中共を権力の所在を示す一つの説明変数とするのであれば、民盟は権力の作用を示す一つの従属変数で

ある。本論文の目的は、中国の全体主義的政権の形成段階における少数政党への対応を探究することにより、この全体主義について理解を深めることにある。この問題を検討するにあたり、本研究は以下三つの論点を提起する。

1. 一九四九年以後における民盟という「参政党」の性格はいかなるものであったか。
2. 政治過程において、民盟と中共との相互作用はいかなるものであったか。
3. 特に梁漱溟と毛沢東の対立にみられるように、民盟の歴史は、中国の建国初期における全体主義的政権の成立と実態にいかなる示唆を持つのか。

従来の研究において建国後の民盟の政治史的意義が過小評価されてきた原因は、あくまで同党の歴史に対する研究不足にすぎない。資料の不足はあらゆる研究の実現を妨げる最も普遍的な要素だと思われる。幸いなことに、現在においては民盟の内部出版物である『盟訊』を参照することが可能になっている。他の一次資料として、南方総支部宣伝委員会[4]が編集した『知識分子的思想改造問題』も未だに処女地の状態を保っていると言ってもよい。このような新しい資料を用いることで、民盟の歴史は完全に浮び上がることはないにしろ、中国の全体主義の歴史を補完するための大切な一歩になるだろう。

なぜ多くの政党の中でも民盟に焦点を当てようとするのかについても説明を加えておくべきであろう。民主党派全体からみれば、それらは半強制的に政党組織の改造を施され、一九五〇年末にその改造が完了したと見られる。政党の財政や人事は人民政府に依存する構造が成立し、統一戦線部を介して中共とのヒエラルキー関係が構築された[5]。民主同盟もその例外ではなかった。だが、それは以下の三つの点において注目すべき代表例なのである。第一に、民盟は民主党派のなかで最大規模を持つ政党であり、影響力を持つ知識人を集結した点において重要である。第二に、民盟の上部組織の構成員は盟員でありながら、他の少数政党の指導者・党員であったことが特徴的である。例えば民盟の創始者の黄炎培は、同時に中国民主建国会の創始者の一人であり、元交通部長の章伯鈞も中国農工民主党の創始者

の一人である。[6] この点に鑑みて、民盟は中国の各民主党派において代表的な政党だといえよう。第三に、思想改造運動や、梁漱溟と毛沢東との対立における重要な主体として、民盟の存在を無視してはならない。民盟に注目する視点がなければ、これらの現代中国史上の重要な政治的事件の分析は不十分だと言わざるを得ない。

(二) 先行研究

1 中国の「全体主義」に関する研究

J. R. タウンゼント (Townsend) は、一九五七年以後の中国の政治体制を「急進的全体主義」に分類した。同概念について彼は以下のように説明している。

> ……急進的全体主義への分類は、下部構造にたいするエリートの支配が比較的完全であるきわめて特徴的な政治構造と下部構造、若干の参加型志向があるがしかしエリートによって支配された制度による以外にそれらを実現する機会がほとんどない一般市民の間の臣従――参加型政治文化、および徹底的な社会的動員と社会的変動を正当化し、体系内部の正統な行動を規定するエリートによって表出されたイデオロギー的政治文化を中国が持っていることを示唆している。[7]

一方、一九四九年から一九五七年にかけての中国の政治体制については、「モデルからの逸脱」と題して以下のように議論を展開した。

> ひとつの評価は、中国が一九四九年には急進的な全体主義体系ではなく、ほぼ一九五七年までその主要な諸特徴を取得していなかったということである。一九四九年の中国は、より正確には、全体主義的性格をもつ「動員化以前の近代的体系」に分類され

る。アーモンドとパウェルによれば、この体系は、近代的な政治的構造が伝統的社会に強制されたために、動員と参加が主として近代的エリートと伝統的エリートの混成体に限定され、他方で民衆は生まれつつある政治的な下部構造のなかにあまり統合されていない体系を意味する。(8)……

そして、「官僚主義的指導様式と毛沢東主義的指導様式との間で転換する均衡関係は、一九四九年以後の中国における変動のひとつの重要な要素」であり、「この逸脱の基本的な源泉は毛沢東主義的指導様式であり、この指導様式は統治構造の規模、複雑性、制度化の制限をもとめ、とくに専門化された官僚主義的利益の発展にたいして敵対的である」とタウンゼントは指摘する。(9)

官僚主義に対する毛沢東の敵意に象徴されるように、二つの指導様式の対立と均衡は一九五〇年代の中国政治史において重要な役割を持ち、「動員化以前の近代的体系」の土台を構成したといえよう。ところが、このような見方はあくまでも「政党エリート」と「行政エリート」との間の政治的力学を描いたものであり、当時の政治体制の全体像を捉えきれていない。すなわち、上述した両者の関係のみならず、「政党エリート」と「政党エリート」、言い換えれば執政党たる中共と、参政党たる民盟などの諸党派との政治力学が捨象されているのである。「民衆は生まれつつある政治的な下部構造のなかにあまり統合されていない体系」にこそ、このような政党同士のエリート関係がより重要であり、政治体制を検討する際には不可欠である。しかも、両方の「政党エリート」は、必ずしも対立関係にならず、むしろ協力的な姿勢は顕著であった。

あらかじめ結論を述べておけば、本研究では、一九五三年の「過渡期の総路線」に関する論争と政治的暴力によるその終結をもって、中国の全体主義的政権が成立したと考える。

2　民盟に関する研究

今日まで民盟に関する通史は、同党の中央委員会が編集した『中国民主同盟史』が唯一である。この公式の立場から書かれた著書においては、建国した直後の時期について冒頭部で以下のように述べられている。

> 一九四九年一〇月一日に……中国は新民主主義社会から社会主義社会への過渡の歴史的に新しい時期に入り始めた。ここに至り、中国民主同盟は発足当初に確立された、反帝（国主義）・反封建（主義）・反官僚資本主義の政治目的をすでに達成した。そして、中国共産党の武装闘争に協力し、反動的統治を転覆し、人民民主（主義）の新国家を打ち立てる歴史的任務を完成した。中国民主同盟は人民民主独裁の政治制度の下に参政する新型の政党になった。[10] ……

まず注目したいのは、新民主主義は社会主義に移行する前提として議論されたことである。建国初期に民盟をはじめとする民主党派にとって、新民主主義はあらゆる形式の政治参加の基礎であったが、社会主義を掲げた一九五四年憲法の発布によってその政治参加が大幅に制限されたのは事実である。[11] それにもかかわらず、この通史は、一九五四年憲法に対する評価として、それを全面的に肯定する態度を取ったと言っても過言ではない。[12] 続いて「新型の政党」という文言が目に入る。民盟にとって一九四九年は確かに大きな転換点だと示唆されているが、どのように新しくなったのかについて明確にする必要がある。そこで、一九四九年一二月の中国民主同盟一届四中全会（拡大）会議（以下、四中全会と略記）で決議された民盟の自己規定を確認すれば、以下の通りである。

> 中国民主同盟は人民民主統一戦線の構成要素の一つであり、知識分子、特にプチブルジョワ知識分子を中心とする政治連盟の一つである。本盟は中国人民政治協商会議の綱領をもって自らの綱領にする、広範な知識分子と開明的な商工業者を団結し、進歩

へ向かい、人民民主統一戦線を拡大し、かつ強固にし、共同綱領を徹底的に実現し、新中国の各種の建設に積極的に参加し、新民主主義の革命を完成することをもって基本方針と任務にする。本盟は中国共産党の指導を受け入れ、同党と密接に活動を協力し、革命建国の偉大なる事業の中にその最大の努力を尽くすことを期待する。(13)

以上の記述からみれば、いわゆる「新型の政党」に変身した民盟は、人民民主統一戦線を強調してそれを自身の根底にあるものとした。人民民主統一戦線が存在しなければ、おそらく新しくなったと主張する必要はないだろう。そして、その階級的属性が「プチブルジョワ知識分子」であることが指摘され、自らが統一戦線のもとに団結の対象となるだけでなく、同様な属性を持つ者を団結の対象とする。さらに、この段階では当然であるが、社会主義という文言は一切見当たらず新民主主義のみ言及されていた。最も重要なのは、中共の指導の受け入れは民盟の立場からすればいかなるものかという問題である。換言すれば、ここでいうところの「指導」とは平野が言う支配を意味する「指導」を指すのか、それとも単なる「指導権」を指すのか、民盟がどちらを選択したかによって民盟の歴史的評価が大きく変わると考えられる。

建国以後の民盟の歴史について、体系的かつ第三者の立場に立って書かれた著作は存在しないため、われわれは断片的な記述しか手にしていない。ここでまた平野の議論を引用することになる。だが、非常に興味深いことに、建国前後の時期の民盟に対して彼は相反する二つの観点を併せ持つ論者である。一方において、独立した政治勢力としての民盟像を持つ平野は以下のように述べた。

確かに、（一九）四八年五月一日の新政協（中国人民政治協商会議）の呼びかけに、中国の民主党派は無条件に応じた。それは国民党の支配の下では、中国の前途があり得ないことが明らかとなり、政治協商会議という形の民主的政治体制によってしか、

新しい中国の建設ができないことが明らかになったからであった。そして彼らは中共の圧倒的な軍事的・政治的力量を最大限に尊重したことも事実である。この段階では、民主党派は中共が新政協の呼びかけ人になることも、中心的役割を担うことも承認したのであった。つまりこの段階で、民主党派は革命の指導権が中共にあることを承認していたのである。しかし、それは中共のこれらの党派への「指導」＝支配を承認したものではなかった。(14)……

他方において、従属的な政治的勢力としての民盟像を持つ平野は以下のように述べる。

……かつて党派会議としての「旧政協」の主体であった「政党」は、中国共産党を除いては、「新政協」の中では「政党」にふさわしい位置を占めることができなくなっただけではなく、それらの党派自身が「新政協」の準備段階で中共の「指導」を受け入れることを表明するにいたり、中共への従属的地位が確定的になったのである。……中華人民共和国の成立以後の政党状況は、「新政協」の成立時に確立した「政党」の政治的地位（＝中国共産党指導下の一種の大衆団体としての性格）をさらに強める以外の何物でもなかった。(15)

その論拠について彼は以下のように述べる。

一九四九年一二月に開催された民主同盟の四中全会の決議は、中共の指導下の「政党」がいかなるものであるかを明瞭に示している。民盟の四中全会がこれまでの「盟章」を改めて民盟の性質を「プチブルジョワ階級の知識分子を中心とした政治連盟である」とし、その政治的任務と政治目標である綱領については「中国人民政治協商会議の共同綱領を民主同盟の綱領とする」と、独自の綱領を持つことを放棄し、「中国共産党の指導を懇ろに受け入れる」ことをも明らかにしたのである。これはすでに独自な政治的目標と政治的役割をもった独立した政党であるとはいい得ず、「中国共産党の指導」というのは、実質的には、中共の

後者の民盟像について、いくつかの疑問が浮上する。第一に、民盟の性質に対する規定、独自の綱領の放棄、そして中共の指導を受け入れるなどの事実は、なぜ平野自身が提示した「『指導権』の承認」として解釈しえないのかという問題である。すなわち、筆者の見解では、それらは単なる「政治的方向性の承認」であるにすぎず、「政治的にも組織的にも独立自主の立場に立つこと」、および「自らの判断で行動すること」という二つの前提を決定的に害することは自明ではない。この場合には、衛星政党のように特徴的な行動（例えば、無条件に近い翼賛）を取るなどの広範な事例が存在しない限り、「指導」の存在を証明することが困難であろう。

第二に、上記の問題と関連して、一九四九年の新政協の開催、および共同綱領の作成に関する中共の狙いは、一九四六年の制憲国民大会における国民党の狙いと異なるからこそ、民盟はあくまでも主体性をもって、自らの選択により、新しい「連合政府」に参加したのである。当然ながら、破壊された組織の中共による再建や、思想的転向による親和性などの側面から見て、民盟は政治的志向の側面において中共に従属した(17)ものの、今日の民主党派のように政党組織の主体性を完全に失うまでには至ってはおらず、少なくともトップダウン式のコントロールは反右派闘争以前に見当たらない。従属すること自体は支配されることを自動的に意味するわけではなく、また自由の完全な喪失も意味するものではない(18)。ただし同時に、中共による漸進的な圧迫の強化は、必ずしも民盟による反抗に導くわけではなかった。事実、民盟は激しい抵抗を展開したどころか、抵抗と呼びうる言動を見出すことさえ困難である。

上記の論点から、本研究は平野のいう「指導権」の議論を踏まえつつ、一九五三年に至るまでの民盟の歴史を探求し、民盟の実態および中国における全体主義の形成との関係性を再検討する。

二　民盟の肖像——その前近代性について

㈠　人的側面：派閥主義

一九四九年九月末に開催された中国人民政治協商会議の第一次全体会議において、民盟は大出世を果たしたといえよう。しかし、建国の祝賀に包まれるはずの時期に、出世を果たさずに大きな不満を持つ少数者はやはり存在した。その代表者は羅隆基であった。会議が開催される前の8月に、彼と一部の盟員は北京飯店に宿泊していたにもかかわらず、わざわざと同じ盟員の劉王立明の家に集まって話し合っていた。その時に羅は葉篤義に向けて次のように語った。「沈鈞儒と章伯鈞は各自の小さなセクトを持ち、しかも共に提携している。私たちのような（民）盟のうちにいる一部の無党派の人はお互いによく連絡すべきである。さもなければきっとあらゆるところで損をする」。案の定、部長のポジションをあてがわれた章や史に対し、政務委員にとどまった羅は腑に落ちなかった。この事実上のセクトに属する他の主要人物も——張東蓀、劉王立明、周鯨文、曾昭掄、葉篤義——も張を除いて全員は自分の配置に対して不満を持ち、民盟の中で排斥されたと思っていた[19]。

上述のような民盟の派閥対立の問題について、政務院総理である周恩来の嗅覚は非常に鋭かった。生まれたての共和国にとって、知識人政党の第一人者である民盟は統一戦線工作の重要な対象であるだけではなかった。民盟の結束は人民政府内部の結束に直結するといっても過言ではなかった。民盟という政党はいわゆる「三党三派」の集合体であり、イデオロギーの側面において一致しない点は一致する部分よりむしろ多く存在すると周も十分に理解していた。そこで、周は多忙な日々を送っていたにもかかわらず、積極的に民盟の指導層と話し合っていた。彼は四中全会において自身の懸念を示した。

……民盟は生まれた日から多党派（の連合）なのです。民盟の中には過去に民社党・青年党があり、すでに除名されました。現在はまだ第三党、救国会、中共の党員などをかかえ、やはり多党派の連合です。我々はこの点を否定しませんが、異なる性質の矛盾をしっかりと見極めるべく、決して民社党・青年党に対するあのような方法で第三党・救国会を扱ってはなりません。……民盟が各党派を受け入れ、各方面を網羅し、進歩を遂げたのはまさに偉大なところであり、過度に党派問題を強調するのはあるまじきことです。……仕事の中で集団主義を強調すべきです。……民盟は団結できる知識分子を全て団結させ、一緒に前進すべきです。個人の仕事・地位に至っては些細なことで、組織の方向・任務が確定した後、またこれらの問題を研究して解決しましょう。(20)

羅のいう「小さなセクト」の乱立は、上述の政治連合体の実態であった。第三党とも呼ばれる中国農工民主党は章伯鈞が率いる政党である。章は「江湖政客」らしく、党内で家父長的な支配を行いながら、常に民盟の名義で彼の党員を拡張し、民盟の内部での不満を引き起こしたと言われている。(21)一方、沈鈞儒や史良が率いる救国会は民盟の中で最も左傾的な政治団体であった。四中全会の閉幕直後に、「中国共産党の指導の下に自身の政治的主張をすでに実現し、自身の歴史的使命を達成した」ことを理由として、沈は救国会の解散を宣告した。(22)とはいえ、周に「党外のボリシェヴィキ」と称された史をはじめ、救国会のメンバーは民盟の構成員として政治的スペクトルの最も左に位置していたに違いない。胡愈之や薩空了のような一部のメンバーが同時に共産党員であったことからみれば、救国会の解散は中共への「一辺倒」だと捉えることもできる。

民盟の結束力が欠如する状態について、面と向かって周はあらかじめ注意を促した(23)ものの、羅はまるで聞き流したように振る舞っていた。そもそも最初に羅をはじめとする「無派閥」のセクトは四中全会が開催されないよう画策していた。特に羅は、民盟の指導層から救国会のメンバーを排除しようとした。(24)もちろんこの試みは失敗し、いわゆる

羅の「親米路線」[25]と派閥主義も批判されるようになった。[26]新設された民盟の中央政治局について、章が政治局秘書長に就任したことで、羅はさらに不満を膨らませた。そこで四中全会以後、羅のセクトにおいてよく議論されたのは、民盟の中央と各地の組織の人事問題であった。その背後にあったのは、人は「元手」であって、人数が多ければ多いほど統一戦線部に重要視されるという考え方であった。[27]以後、羅は自宅で食事会を開き、招かれたのは全員名高い「高級知識分子」であった。

このように、羅たちは政治的志向やイデオロギーの相違によって他の民盟内勢力と対立したとはいえず、むしろ個人的な不満を発端として他の勢力と対立し、結果的に赤裸々な権力の争奪戦を招いてしまった。しかも、このセクトは厳格に組織化されたものではなく、明確な行動指針を持たないまま、無意識のうちに民盟内権力の掌握を自己目的化した。さらに、そのメンバーの集合場所が構成員の自宅であった点から、セクトの性質は極めて家産的であって、集団を繋ぎ止めたのも専ら私人関係だと理解することができる。救国会や農工党も同じく成熟した組織であるとはいいがたい。前者についていえば、その政治的立場が中共と至近距離にあることから、中共に溶け込もうとした。後者についても、従来の「第三勢力」を自称したことや指導者の特徴からみれば、政治的投機の色合いが比較的強いといえよう。[28]成熟度の低い組織の特徴の一つは、不利な局面に遭遇すると直ちに解体してしまうことである。「無派閥」のセクトの場合、まず一九五一年に、満州におけるソ連軍の規律違反行為を暴露した劉王立明が民盟内で厳しく批判されたことに対し、羅がただの傍観者に留まったため、劉は当然のようにセクトから去っていった。そして同年にいわゆる「張東蓀叛国案」が発生した際、羅はあっさりと張を見捨て、その後セクトは自然消滅した。[29]結果的に、民盟は人的側面において、甚だしく前近代的だったと言わざるを得ない。

㈡　政党組織の側面：緩い集合体

政党組織の側面についても、前近代性を見出すことができる。「総部組（織）委（員）会の一九五〇年上半期工作総括」に記された以下の文章からは、民盟が直面していた組織的苦境が如実に浮かび上がる。

> ㈠　地方組織を整備し、順序よく整理、恢復、設立する
>
> ……第一に、上役は一般盟員と密接に結びつくことが全くできない。各地の組織と一般盟員との関係は、いまだに一定の連絡制度と方法がない、組織と盟員との間には、接触が非常に少ない、個別の盟員が問題を発生したことに対してさえ一部の組織は知らないままだった、通常は単にわずかな私人的な関係と付き合いに頼っている……
>
> 第二に、組織生活に不備がある。……一部の地方組織の盟員小組に対する取り組みと指導には不備があり、登録済みの、転入してきた、あるいは新しく吸収された盟員に対して、その都度直ちに小組に編入するが、小組の生活に参加させることができていない。不備がある小組に対して、直ちに調整を行うこともできていない。小組が多い地方組織において、常に実際の必要性に応じて迅速に支部を設立し、小組に対する指導を強化することができない。同時に小組の指導方式と方法および小組生活の内容のすべてに対して、随時踏み込んだ研究と改善を行うことできなかった、これらは、指導に関する欠点である。次に盟員についていえば、まさにプチブルジョワ階級の知識分子であるために気ままでだらしがなく、組織の指導を軽視する状況が深刻に存在する、往々にして「仕事が繁忙だ」あるいはそのほかの事由を言い訳とするため、小組生活に参加せず、小組に会議を開けないようにさせ、指導上の指示を徹底して執行することはない……
>
> 第三に、計画性に欠ける、並びに大雑把でいい加減な態度が存在する。……各地の組織の工作報告に基づいて、多くの組織はなんと一つの座談会を開く際にも、事前にしかるべき準備ができていない……このような工作状況の報告について、とりわけ中身がなく、工作のポイントがどこにあるのか、その収穫が何であるのかがわからない。……

第四に、仕事上の消極性と引き延ばし。……

第五に、平穏なくらしを営もうとする思想。一部の地方組織の上役は、自分が地下工作を行った時期に相当長い間、革命闘争で苦痛を被ったと思っている。解放後、民盟が公に転じて、合法的な地位を取得し、自分も政府の仕事に参加したため、今日を昔と対比して、平穏なくらしを営もうとする考えは強い、あるいは保守的な心理が存在し、工作に対して「功績があることを求めず、過ちがないことを求める」および「一事を増やすより一事を減らす」というお茶を濁す態度を示す……

㈡　旧盟籍を整理し、新盟員を勧誘する

……第一に、極少数の地域を除き、ほとんどが直ちに（盟員の登録と審査を）完了することができないにとどまらず、非常に長い時間に放っておかれている……

第二に、……たとえば一部の盟員は登録をしても、その後組織の生活に参加することができない。組織としても根気よく説得を行い、その人を小組に編入させて学習させ、たえず連絡を取って指導をし、それによって政治的認識を高めて、組織としての主張を強めることもできない。相当の時間を経た後に、あろうことか、組織上自動離脱だと見なし、その盟籍を削除してしまうケースさえあった。たとえばある省の支部ではこれに類似したことが発生し、一度に一〇三人の盟籍を削除することを報告して承認を求めてきた。これは実に知識分子を「受け入れ、団結し、教育する」本盟の趣旨に背くものであり、審査・登録を処理する政治的意義が失われている。……

㈢　盟員の学習と改造を強化し、進歩を勝ち取り、就職を援助する

……ある盟員は「入盟」を仕事探しの「活路」と見なし、盟を「職業紹介所」と見なしていることを我々は指摘しなければならない。一部の盟員は仕事のない時に毎日組織を訪ね、仕事が見つかった途端、二度と訪ねることはない……(30)

この「総部組（織）委（員）会の一九五〇年上半期工作総括」に記された苦境は、中華ソビエト共和国時代の中国共産党の組織的状況を想起させる。(31) 組織における連絡手段の欠如と緩い組織構造、私的な構成員関係と私的な打算、

組織としてあるまじき高い人的流動性、およびその結果としての極めて弱い構成員に対する把握などの問題が見られる。それに加えて、ほぼすべての左翼政党に共通することとして、政権側につくと必然的に保守化が進行する傾向も見られる。ただし、一九五〇年代の民盟は中華ソビエト共和国時代の中共と決定的に異なる点がやはり存在する。第一に、政党としての発展空間が、後述するように大幅に制限されたことである。第二に、強力な中央集権の政府機構がすでに存在していたことである。そして最後に、政治的発言力は軍事力に裏付けられるという中国政治史の文脈において、「軍隊国家化」を唱えて私兵を持たない民盟の政治的自由は、あたかも蜃気楼のような存在であった点である。派閥主義の強い人的構成と非常に後進的な政党組織により、民盟と建国以後の中共との間には顕著な非対称性が見られた。この非対称性が存在するからこそ、民盟は中国の全体主義化の動きを測定する従属変数になりえたのみならず、全体主義的要素を帯びる政治体制の特徴を体現する存在にもなり得たのである。

㈢　中国共産党との関係：従属と独立のバランス

次に民盟と中共との関係に注目しよう。第一章の第二節で既に検討したが、民盟の四中全会で改正された中国民主同盟盟章の総則において、中共の指導権が正式に承認された。「プチブルジョワ知識分子を中心とする政治連盟」や「広範な知識分子を団結する」などの自己規定は、周恩来の意思をはっきりと反映した部分である。その前提として、「民盟は引き続き存続すべく」「今は党派を取り消してはならない」、「組織として民盟は共産党と区別されるべきだ」[32]と周は明言した。総則ではさらに以下のように規定している。

> 本盟の内部では必ず政治的原則上の一致を求め、それをもって全盟の団結の基礎とし、政治的路線上の正しくない傾向に対して、是正を加えなければならない。

本盟は民主集中制の基礎の上に、組織の規律を打ち立てて維持し、それをもって組織力を発揮し、本盟の政治路線の執行を保障しなければならない。……

批判と自己批判は、全ての革命組織がそれをもって自身を打ち固め、大衆と連携し、業務を改善する有力な武器である、本盟はこの武器を掌握して正しく運用することを身につけなければならない。[33]

四中全会では、「我々が盟員の間における思想の完全一致を直ちに要求することは不可能であるが、本盟の政治総路線（反帝国主義・反封建主義・反官僚資本主義、革命の完遂、新民主主義・共同綱領の実施）に忠実に従うことにおいては盟員の完全一致を要求する」[34]と強調した。このように、「政治的原則上の一致」の趣旨は、民盟内における多様な政治的志向を持つグループにとっての最大公約数の確認であり、多様性に対する妥協であったと考えられる。一方、「批判と自己批判」の部分においてさえ、周の影が見られる。「思想改造はまず自己批判で、第二に相互批判だ、自己批判だけがあって相互批判がないのもいけない。……批判と自己批判は、思想改造の最も良い方法だ」と周は述べている[35]。この総則の最後の部分は、あたかも知識人に対する思想改造運動の開幕を予告するような一文である。総じて、建国初期の民盟がかろうじて統一を保ち、「汎左派政党」として政権に参加できたのは、周の政治的手腕の産物であり、中共の「指導権」を完璧に体現したものだったと考えられる。

「指導権」の承認による政治参加は、まったく代償を伴わないわけではなかった。この代償について、楚図南は重慶市の盟員座談会における「当面の西南区の盟員の中に存在するいくつかの問題」と題する報告で以下のように述べた。

先ほど一部の同志たちは（盟員）全般の反応に言及し、（次のように述べた）。盟員たちはいま「味が足りない」、「物足りない」、

民盟に参加するより中共に参加した方が良いと思っている。また一部は、現在の民盟は旧政協（一九四六年時の政治協商会議）の時よりも「歓迎されていない」、十分に重視されていないと思っている。……現段階において（新民主主義革命の過程において）、民盟はその歴史的使命と革命の任務を抱えている。我々の今日の任務は、主に知識分子、開明的な商工業者と華僑の中の愛国民主分子を団結し、教育し、労働者階級と共産党の指導のもとで民主統一戦線を打ち固めて拡大し、人民民主独裁を実行し、各レベルの人民政府に協力し、共同綱領の徹底的な実現を推進し保障させるようにし、独立、民主、平和、統一と富強の新中国を建設するために奮闘することにある。思想上この点がしっかりと理解できれば、業務が効果的に遂行できているかのみ考えるようになり、物足りないとか不十分であるとかという問題ではなくなる。……

それ以外に、私は常に、大衆の中に行き、大衆を指導するのだと同志たちが言うのを聞く。……しかし、あなた自身はろくに学習せず、まず自分を充実させようとしない。自分を磨けずに、大衆の中に入れば、どのような影響が生じるだろうか。必ず悪い影響が生じると私にはいえる。大衆はみんな「組織」をもち、進歩している。我々は過去の古い思想、古いやり方、古い態度を是正しなければならない、そこではじめて新しい情勢のもとで大衆に接近し、大衆に良い影響を与え、進歩的な作用を及ぼすことができる。つまり千言万句（をまとめると）、我々は依然として学習、学習、さらに学習（に取り組むのだ）[36]。

要するに、政権への参加と引き換えに、民盟は「新しい情勢」への非常に困難な適応を強いられたのである。この報告がなされたのと同時期の一九五〇年七月五日、民盟は中国共産党中央委員会による「各民主党派組織の活動に関する決議」を受け入れた。その結果、「人民解放軍や公安部隊を含む部隊およびその軍事機関、学校と軍事企業の中に」盟員を勧誘すること、およびそれらの機関において組織活動は行わないことを全国委員会工作会議において決定した。同時に、他の民主党派と一致し、「自動的に諜報機関、革命大学、旧人員訓練クラス、大使館領事館などにおいても組織活動を行わないと決定した」[37]。それだけでなく、各民主党派は勧誘の範囲について協議し、民盟のメンバーシップの範囲を文化教育分野の知識分子に限定した[38]。このように、「学習」を先行させるという楚の発言は、大

衆路線を取りやめ、メンバーシップを知識分子に限定する上での名目上の理由であり、「決議」が民盟の政党としての活動に与える萎縮効果は非常に顕著であった。報告で楚図南が自認したように、青年、婦女、文化界、労働者、農民に関わる各組織は、中国共産党から集中的に指導を受けるか、あるいはすでに集中的な指導（体制）を有していた。国家暴力や近代的な情報装置からの強制的な排除、そして政治的下部構造からの半強制的な締め出しは、建国からわずか一年足らずの間に民盟の発展空間を厳しく制限した。そのうえ、従来の「中・下層（の文化・教育界の人員）を主とする」組織路線は、一九五二年には「中・上層を主とする」方針に変更された[39]。つまり、大学生をはじめとする重要な集団は、民盟の潜在的勧誘対象から排除されてしまったのである。政党組織としての活動範囲の制限とその位置付け（「政党」として適格であるかどうか）、そして民盟の役割分担（「大衆路線」の否定）に対する下層盟員の不満は、一九五三年まで根強く存在したと見られる[40]。

この不満は、下部組織の活動において顕著に見られる。民盟の大本営である重慶の学習委員会の記述からは、以下のような公式イデオロギーからの離反が浮かび上がる。

> 政治性の乏しさ。……目前の組織生活の中の政治的雰囲気はかくも乏しく、我々を取り囲んでいる熱い革命闘争の情勢といかに釣り合わないかがわかる。組織生活においては革命闘争の匂いを嗅ぐことができず、政治の波の波動を感じることができず、まるで我々は組織生活が広範な人民の激烈な闘争と無関係に孤立して存在しているようである。……
>
> 思想性の薄さ。プチブルジョワ階級の自発性と盲目性に我々の組織生活が支配されることにより、小組の討論においては散漫さ・麻痺・あしらう現象、孤高・傍観・お茶を濁すような確固たる立場がない現象、および濃厚な個人主義・功利主義の思想が表れている。……大多数の同志はマルクス・レーニン主義と毛沢東思想をもって我々の指導的思想にすることを承認し、多くは学習を行っているとはいえ、事実上、我々の組織生活を治めるのは依然としてプチブルジョワ階級の思想、ひいてはブルジョワ

階級・封建的地主の思想である。……

闘争性の弱さ。我々の組織生活についてみると、一部の小組は批判を展開することができない、一部の小組は批判するが深く立ち入らない、全体の状況からいうと皆闘争性が欠けている。(41)……

下層盟員の「思想問題」は各期の『盟訊』において繰り返して提起された。この状況は一九五三年まで続き、北京市支部の支部委員会工作総括報告においては以下のように述べられている。

我々の思想的指導は大きく業務遂行上の要求に後れを取っている。今日に至るまで、一部の基層組織はいまだに盟員の思想状況を掌握せず、市支部はなお盟員全体の思想状況を掌握しきれていない。……否定できないのは、我々の盟員のなかに、いまだに正しくない思想意識が多く存在していることである。我々は一連の思想闘争を経なければならず、そうしてはじめて統一された認識に達することができる。目前の状況についてみると、我々のこの面における思想指導は非常に足りていない。……我々の少なからぬ盟員の政治性と思想性は十分に強くはなく、彼らは工作における革命的創造性と積極性に欠けており、ひいては政治を問わない深刻な傾向がある。これは、我々の工作が非常にまずく行われており、未だに体系的にマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の学習を行っておらず、自己改造工作を工作の日程表に載せられていないということである。これは我々の任務の完了にとって、もちろん大きな妨げとなる。(42)

このように、民盟の指導層は積極的に中共に寄り添おうとしたが、だからといって基層の小組は自動的に中共に傾くわけではなかった。思想面においては指導層と対照的に、下層の多くの盟員は「超然主義」の立場を取っていた。この超然主義は、一種の処世術だと捉えることができる。実際、民盟の政党組織はあたかも根のない藻屑のようであり、ただ単に歴史の大波に流されるのを待ち続ける運命にあった。ただし、たとえそれが藻屑であっても、最終的に

は小さな抵抗を試みた。一九五一年一一月一一日から一二月一日にかけて北京で全国組織宣伝工作会議が開催された。この会議で胡喬木が講話を行い、共同綱領を準則として、愛国主義、集団主義の教育を行い、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を学習し、批判と自己批判を展開し、自覚的に世界観を改造する任務を行うよう提起した。それに対し、民盟の以下のような自己規定をもって応じた。

> 盟員の主要構成員は知識分子であり、その大部分はプチブルジョワ階級出身とはいえ、知識分子は従来一つの階級に属したことがない。そのため、民盟は単にある階級を代表する政党になることが不可能であり、その性質はただ一種の「階級連盟」にすぎない。したがって、民盟は盟員に対し、共産党員のように、マルクス・レーニン主義を思想と行動の基準とするよう要求することが不可能であり、ただ共同綱領を民盟団結の統一の準則として要求し、労働者階級およびその先鋒隊である中国共産党の指導を受け入れるという思想を確立する。(43)

会議の最後に、盟章の総則が修正され、民盟の性質は「プチブルジョワ階級の知識分子を主要な要素として、階級連盟の性質を持つ新民主主義政党」に改められた。一九五三年七月二五日に発布された「七中全会拡大会議の基本総括」においても、「当面においてマルクス・レーニン主義を盟内の指導思想として要求し、全ての盟員の思想と行動の準則と見なすのは、実際にそぐわない(44)」という一文が加えられ、上記の自己規定があらためて強調された。この趣旨について、沈志遠は以下のように理論的説明を試みた。

> 労働者階級（共産党）を先導とする思想を指導思想として受け入れるのは、各民主党派そのものの思想が、労働者階級の思想、マルクス・レーニン主義の思想になるはずだということに等しいわけではない。……まず実際の事実に適合しておらず、次に革

命の客観的要求にも適合しない。……共同綱領は労働者階級を先導とすることを規定しているだけでなく、そのほかの民主的階級の合法的存在を承認してる。そして各階級の物質的存在（基盤）は、各種の階級的思想が同時に存在することを定められた。……共産党とあらゆる真のマルクス・レーニン主義者はみな新民主主義の歴史的段階におけるブルジョワ、プチブルジョワの思想の合法的存在を承認している。したがって共同綱領の精神の実質に依拠しながら、労働者階級以外の三つの友人階級の思想は合法的に存在するはずである。……

……仮に各民主党派がみな共産党のようにマルクス・レーニン主義を内部の統一された思想準則とするならば、それらの成員は「一律に」進歩分子あるいは党外ボリシェヴィキになる。そうなると今日の各民主党派の成員の数は大幅に減少するかもしれず、それらは完全に大衆から離脱して自身を極端な孤立に陥らせることになる。したがって各階級、各階層の人々に対して団結、教育、改造を行う任務も完全にふいになってしまう。これでは、民主党派は存在の根拠を失ってしまう。自身の思想的準則を各階級、各階層の人々が受け入れられるもの、および受け入れなければならないもの（共同綱領の全ての条項およびその思想的実質）と規定してはじめて、各民主党派は団結できる人をすべて取り入れ、彼らに対して教育と改造を行い、そして彼らを携えて一緒に前進することができる。[45] ……

この論述は、同時代の中共の論説と比較すれば、論理的によく整理されたものであると評価することができる。一九五三年の段階では、中共の「指導権」（「指導」そのものではない）を再び承認することは最大限の譲歩であったと理解することができる。二つの側面、つまり共同綱領を盾とする消極的な論証、および民盟に残されたわずかな存在意義による積極的論証に基づきながら、政治的思考の自立性を守り切ることに沈は懸命であった。このように、民盟は、その前近代性を根強く残したまま、一九五三年半ばまで、政党としての独立性を辛うじて維持していたと考えられる。一方で、民盟は派閥主義の色濃い政党としてすでに限界に達していた。その限界は一つの政治組織としての結束の限界を意味するだけでなく、政治的自由の面での限界をも意味する。そして、自己規定と政党の性質の変容は、一つの

会議によってもたらされたものではなかった。その大きな背景の一つは、建国当初から始まった知識分子改造運動である。

三　知識分子改造運動——共謀および矛盾

知識分子改造運動という言葉を聞けば、知識人に対する抑圧と強制を想起するのが自然であろう。しかし、一般的なイメージに反して、この政治運動においては、中共と民盟両方の「政党エリート」の間で生じた対立は顕著ではなかった。それどころか、民盟は思想改造運動における「共犯者」として位置付けることすら可能なのである。

同調的姿勢を取る知識人の代表者として、民盟に属する社会学者、『郷土中国』の著者である費孝通が挙げられる。一九五〇年に、知識分子に対する広範な「改造」について、彼は非常に興味深い思考過程を公表し、「改造しなければ立ち遅れる」と題して以下のように記した。

> ……共通講義を行った時に学生たちが提起した問題をまた思い出した。問題はこうだ。「存在は意識を決定する、社会的事実が変化したら、一人の思想は自然に変化するようになると先生はおっしゃいますが、それならば、政治の授業をする、思想改造をやるには及びません。社会的事実がいまだに変化しないのであれば、思想改造をやるのも無駄ではありませんか」。さらに、ある学生は問う。「今は四大階級連盟ではありませんか、今はプチブルジョワ階級の存在を認めているではありませんか。なぜ我々はプチブルジョワ階級の思想を変えるのですか。プチブルジョワ階級が現実に存在する限り、プチブルジョワ階級の思想を改造し得ますか。私はかなり疑っています、マルクス・レーニン主義は存在が意識を決定すると主張しているではありませんか。」(46)

教え子からの重要な理論的問題提起は、言うまでもなく思想改造を否定する論理に結びつく。それに対して、費は文末において『ソ連共産党（ボリシェビキ）歴史小教程』の一段落を引用して、それをもって最終的な回答とした。

> 種々さまざまな社会的な思想と理論とがある。古い思想、理論があり、これは衰退しつつある社会勢力の利益に奉仕するものであり、すでに生命をおえている。これらのもつ意義は社会の発展、社会の前進を妨げるものである。ところが、また新しい先進的な思想や理論があり、これらは先進的な社会勢力の利益に奉仕するものである。これらは、社会の発展、社会の前進を容易にする役割をはたすものであり、それが、社会の物質生活の発展の要求を正しく反映すればするほど、いっそう大きな意義をもつのである。(47)

このように、費は同時代の『経典』の記述をもって自身が直面する思想改造を正当化しようとした。建国の歓喜に包まれながら、マルクス主義やソ連の『経典』を学習し、費と同じように新政権の政策とイデオロギーに寄り添おうとした知識人、中でもいわゆる「高級知識分子」は少なからず存在した。当時の彼らの文章から浮かび上がることとして、新時代の論理を懸命に理解し、プチブルジョワ階級として「進歩」を追求することに必死であった。まさに銭理群が強調したように、「毛沢東文化は中国共産党に属するだけでなく、中国人民（知識分子を含む）も毛沢東文化の創造と発展に参加し、彼らの中の多くの人は積極的に『かごを担ぎ、知恵を貸し』たのである。中国の知識分子を単に毛沢東時代の被治者と被害者と見なすわけにはいかない、彼らは同時に歴史の参加者であり、二十世紀において発生した中国のこの部分の歴史に対して、彼らは同様に自分の責任を負うのである(48)」。思想改造運動における民盟指導層の言動は、銭の論述を裏付ける歴史的事実になるといえよう。

以下では、思想改造運動に関する民盟の資料集である『知識分子の思想改造問題』の内容について検討する。とい

うのも、この資料集は、当該運動の標的であった民盟が、運動に対していかなる態度と思考をもっていたかを直接的に物語る点において価値あるものであるからである。まず、民盟中央常務委員の鄧初民は運動の基調を次のように定めている。

> 中国民主同盟はその性質について言えば、プチブルジョワ階級知識分子を主要成分とする階級連盟の新民主主義政党である。その任務は広範な知識分子階層を団結し教育し、そして改造することである。そのため、民主同盟の盟員の思想改造問題は、基本的に知識分子の思想改造問題である。(49) ……

これは民盟全体が最初から思想改造運動の標的だと認識する決定的な一文である。特に重要なのは、民盟が思想改造運動に全面的に包摂される理由として、民盟の自己規定をあげていることである。しかも、ここには消極的な受容ではなく、積極的な関与が示唆されている。このような論理的な論述の構造は資料集に収められたさまざまな文章に見出すことが可能であり、マルクス主義の理論を自在に用いて議論を展開したことがわかる。その一例は、民盟南方総支部主任委員の李章達による以下の報告である。

> ……知識分子の階級的地位は、その階級の出身、家庭状況およびその生活資料の出どころなどを根拠に簡単に決定することはできず、自分の知識がどの階級に奉仕するか、その階級の利益のために奮闘しきれるかという点を見て決定すべきである。一つの階級の政治上、思想上の代表は、本階級の経済利益が許容し要求する範囲を決して超えることはない。(だが) 知識分子は、自分の思想内容に基づいて活動するのであり、その生活資料を取得する状況に基づいて決定するのではない。(50) ……

要するに、労働組合に参加した知識人は労働者階級に属するが、労働者階級の知識分子になったとはいえないと主張しているのである。また李は、プチブルジョワ知識分子が、国家の発展とともに自然に労働者階級に変化するという理由により、改造を免れることはできない、とも主張している。左傾的傾向をもつ盟員は比較的頑丈な論理的枠組みによって思想改造運動に対する様々な盟内の反発を封じ込めようとし、ある意味では「手際がよい」と評価することができる。下部構造と上部構造との間に特殊な関係を持つという知識分子論に関しては、民盟総部宣伝委員会副主任の黄薬眠も言及を怠らなかった。

> 知識分子について、彼らはプチブルジョワ階級の中の特殊な階層である。彼らは思想上に大きな相違が存在するかもしれないとはいえ、彼らは一つ共通の特徴を有する。それは一般的にいえば、彼らは生産手段を持たず、知識をもって生活資料に代替するということである。そのため、彼らはただ他の階級に依存しているのであり、その依存性は特に顕著である。またそのため、今日において、……プチブルジョワ階級知識分子をプロレタリア階級知識分子に改造することは完全に可能であり、そのための客観的な現実の基礎を完全に有するのである。
> ……民盟の今日の主要な任務の一つは、まさにこの知識分子の改造工作を分担することである。(51)

この強固なマルクス主義理論に基づく枠組みは、思想改造運動を全面的に擁護し、民盟における思想改造の必要性を正当化したといえよう。しかし、ここで生じる一つの矛盾は未だに解消されていなかった。すなわち、改造を唱える主体は、同時に改造される主体でもあることである。換言すれば、「先進的」な思想を唱える民盟は、同時に「後進的」な政党でもある。そのため、「後進的」主体の存在意義が再び問われざるを得なかったのである。この矛盾を解消するために、黄は引き続き以下のように議論を展開した。

……もしある者が、民盟はプチブルジョワ階級知識分子をその主要構成部分とするからには、それは一般的に彼らの利益を代表するのかと尋ねるとする。我々の答えは肯定的である。ただし必ず説明しなければならないのは、いわゆる利益を代表することは、その階級の中のある一人の個別的利益、あるいはその階層の保守的な利益を代表するのではなく、この階層全体の基本的な利益、進歩的な利益を代表するということである。

……もしある者が、なぜ我々は民盟の盟員になり、盟員になることに何の意義があるかと尋ねたとしよう。我々の答えは、民盟の盟員は大衆による政治教育を得ることができ、自己改造を加速することができるというものである。また、もしある者が、民盟が革命政党である以上、なぜ革命政党の党員を再び改造しなければならないのかと尋ねたとしよう。我々の答えは、民盟は過去において確かに輝かしい歴史を有するが、今日の新しい状況は我々に新たな任務を課した。知識分子の思想は今日の新中国の建設ために必要とされ、ゆえに我々もこの光栄な任務を担うべきである、というものである。もしある者が、我々はプチブルジョワ階級で、四つの友人（四つの友好階級からなるブロック）の中の一つであるのに、なぜ再び思想改造をしなければならないのかと尋ねたとしよう。我々の答えは、新民主主義は社会主義へと発展するため、人民は絶えず進歩しており、もし我々自身が進歩しないのであれば、我々は後ろに見捨てられるようになる、というものである。まさに労働者階級は我々の仲間であるため、彼らは善を勧めて過ちを正し、我々が改造するように注意する。もしある者が、プチブルジョワ階級知識分子自身は進歩的であるのに、なぜ再び改造しなければならないのかと尋ねるとしよう。我々の答えは、プチブルジョワ階級知識分子の進歩性には限度があり、永遠にプロレタリア階級にともに歩むことではじめて、その進歩性を発揮することができる、というものである。知識分子の改造は、まさにこの知識分子がプロレタリア階級の指導下において、その進歩性を発揮して自身の後進性を批判し、自分を一歩向上させることによって達成されるのである。(52)

想定されるいくつかの重要な問題点に対して、黄は綿密な反論を展開して結果的に成功したとみられる。結果的に、民盟は自己の組織的性格について、「限定的な前進性」を持つという評価を下した。この「限定的な前進性」はまさ

に組織の存続と組織の独立との間でバランスを取るために選択した必然的な結果であり、一種の高度な政治的知恵が体現されている。一九五〇年代初期において、中共に対していかに政治的な親和性を持つとはいえ、組織の独立を守ることが、民盟にとって最優先事項であったことを資料集は示唆している。思想改造運動の側面からみれば、民盟は中共による全面的な「指導」ではなく、あくまでもその原則としての「指導権」を認めたと言い得る。ところが、その独立性は、早くも一九五三年九月に脅威に晒されたのであった。

四　反右派闘争の前奏——一九五三年の異変

一九五三年に梁漱溟と中共の指導者たち、特に毛沢東との中央人民政府委員会第二七回会議（以下、政府委員会会議と略記）における対立の兆しは、以下の内容において現れたといえる。

> もっと簡潔に言うと、私は過去に共産党の友人に対して好感をもち、政治的に協力的な行動に至ったが、思想的見解においては常に大きな距離があり、一九四九年の全国解放の前夜に至るまでも、自分の正しさを信じていた。……現在ではその距離は確かに大きく縮まり、かつ依然として縮まりつつある。
> ……しかし頷くところはおのずから頷いた。まだ頷けないところは、もとの意見を放棄することができない。[53]……

アメリカ漢学者のAlittoはこの新聞記事の冒頭を引用して、「梁が、彼の暗黙の反マルクス主義的見解を否定することを拒否したもの[54]」と評価した。筆者の見解では、この評価は半ば妥当であるが、半ば不十分である。記事の文脈から見る限り、梁は階級闘争や唯物主義などの概念の適用に対して真正面から肯定したと評価すべきである。この傾

向はすでに「国慶節の一つの正直な話」[55]から窺えるものである。また、実質的な反マルクス主義者が、その後自らロシア語を学習するなどということがあるであろうか。[56]梁の態度についてより正確な表現は、「公式イデオロギーの権威への限定的な承認」であると筆者は主張したい。なぜなら従来の中国社会の性質などの問題について、彼は自分の理論を一貫して堅持し微動だにしないからである。梁は古代中国において階級は存在しなかったと主張して、人類社会の五段階を論じるマルクス主義的歴史観を実質的に拒否した。階級闘争という当時の中心的概念に関して、梁は革命の観点からのみその有用性を認め、唯物主義（または唯物史観）についても「主導権を得る」、言い換えると能動性の観点からのみそれを受け入れていた。ここからは、自身の根本的命題を変更せずに公式のイデオロギーとの間を架橋しようとする梁の意図が読み取れる。残念なことに、この企てはあまりにも露骨なものであったために、案の定、多くの人々の非難の的となってしまった。

同党の千家駒は、梁に対する痛烈な批判を彼らの機関紙『光明日報』で繰り広げた：

> 筆者は本文において梁先生の「まだ頷けないところ」に対して幾らか論じ、彼が頷くようになることを望むつもりはない、それは私の僅かな能力でできないからだけでなく、おそらくいかなる人にもできないからである。ここで私はただ梁先生が頷いたところにつき、取り出して少し検討したい、梁先生が頷いたところは一体何なのか？　頷いて間違ったことがあるのか？　つまり、梁先生の二年間以来の思想的転換は、一体いかなる思想的基礎の上に築かれたのか？　彼はマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の一部を受け入れたのか？　それともマルクス・レーニン主義を曲解し、彼自身の形而上学の思想体系を中国革命に当て嵌め、中国共産党が中国革命の成功を先導することを歪曲するのか？　私たちは当然知識分子の思想改造を歓迎するが、思想改造は必ずマルクス・レーニン主義の土台の上に行われなければならない。この種の改造はほんの少しずつであっても、土台は頑丈である。さもなければ思想を「整理できた」と思い込み、実のところは「整理できて」いない、「自発的」ではあるが、「貴重」なわけでもない。[57]……

梁の文章の中にある歴史観やイデオロギーに関する争点に深く踏み込み、論争に決着をつけることを千は全く考えていない。むしろここで肝心なのは、論争の発生そのものである。晩年に書いた回想録の態度とは真逆だといっても過言ではないくらいに、経済学者の千は一九五〇年代において極めて「左傾」的な人物であった。まさに千が指摘したように、梁は一見マルクス・レーニン主義に頭を下げてその論理と言説を受け入れたとはいえ、彼の基本的な世界観や歴史観はほぼ動じず、せいぜい「修正主義」の程度にとどまっていたことがわかる。梁が表明したような「限定的な承認」に含まれるニュアンスの一つは、権威を備える公式イデオロギーの論理に対して完全に納得するわけではなく、説得力の不足を暗示することにある。共産党や共産党に同調するイデオロギーを持つ人々から見れば、単純な思想的拒否より、実質的な理論の批判を行って根底にある中心的思想と距離を置くことはよほど容認しがたいものであったと考えられる。それはイデオロギーの正統性に対する深刻な脅威にほかならない。嵐のように襲ってきた批判に対して、梁は学者ならではの冷徹さを持って反撃を展開した。

……現時点でご教示くださった諸君は例えば医者であり、私のことを病人――思想的に病にかかっている人だと見なしてもかまわない。あなた方が自らしっかりと検査や診断を行い、その後に症状によっては薬を処方するよう願っている。この病は決して浅いところにあらず、一目見てわかるようなものではない。もしこの病を見分けやすくて治しやすいと漫然と思ったら、大間違いである。……

私はずっと病の中に生活しており、「病に頼って生きている」、殊に自覚することもないほどである。全国解放によるこの二年間の新しい事実が私を教え諭すことがなかったならば、いっそう気づくことができなかっただろう。しかし自分が発見したのは何らかの症状のみ――何かしらの見識の不足あるいは判断の間違い――である。病源に対しては無自覚にも一つだけ見えたことは依然としてプチブルジョワの立場にあるということである。当面の新事実に依拠して自らの何かしらの見識の不足あるいは判断

の誤りを修正した後も、古くから自らに根差した理論は影響を受けない。そこで私はもとの土台の上に新しい見解を築いた。「この二年私にどのような変化があったのか」という自述はまさにそのことを書いたものである。千先生はここで意外によく見ていた。「梁先生の二年間以来の思想的転換は、一体いかなる思想的土台の上に築かれたか」と彼は問う。「思想を整理できたと思い込み、実のところは整理していない」と彼はまた言う。その通り！　私が整理できたのは当面の新事実と私の旧理論の間のものである。(58)

病人と自称した梁の姿は、筆者が提示した「公式イデオロギーの権威への限定的な承認」という仮説をさらに説得的にする証左である。ところが、この「病人」だという比喩の裏には、医者たる先生方は「治療」する力をほぼ持たず、論理的になす術がないという皮肉が内包されている。晩年の梁はこの時期を振り返って、「私はマルクス主義の観点を全面的に受け入れたわけではなかったし、できなかったのである」としている。(59) 千家駒の批判に対して、梁は真正面からそれを承認しており、そこには論戦を受けて立とうという姿勢が窺える。ところが、理知的で敢然たる反論の末に、彼に対する批判は消失し、政治協商委員の公務にも影響せずに済んだ。その理由としては、Alitto が述べたように「梁の思想への大衆の共感と、彼の人間性への尊敬が広く定着していたか、それとも毛沢東との関係が彼を保護したかのどちらかである」。しかし、まさに彼を論戦から守った毛沢東との関係性が引き金となり、梁は政治生命における最大の危機を迎えた。一九五三年九月一一日の全国政治協商常務委員拡大会議において、発端となった発言の草稿には以下のように記されていた。

過去の二十年の革命は全て農民に働きかけ、農民に頼ってきました。……今の建設の重点は工業にあり、ここに精力が注がれています。生活の差（についていうと）、労働者は九天（の上におり）、農民は九地（の下にいるの）です。農民が都市に駆け込む

と、（政府は）それを許しません。人材や財力は都市に集中し、遺棄だと言わないとしても、またちぐはぐだと言わないとしても、おそらく多少は（存在します）。人民に対して配慮が足りず、教育が足りず、手配がよくない、建国がこのようなありさまでどうなりますか？　当初の革命で農民は日本の侵略者、国民党反動派の暴虐を受けて、共産党と家族のように親しんでいましたが、今日このような状況はもはや存在しません。(60)

この「問題発言」の中核となる言葉は、間違いなく「九天九地」である。ただし、この言葉はもともと梁が最初に発したのではなく、他人の言葉を借りて引用したという。非常に耳障りな発言だと考えられるが、この段階で周恩来には全く批判する意思が見られず（ただし、周は八日にすでに「過渡期の総路線」を報告し、梁の発言の後にも工業化の必要性を繰り返し述べており(61)）、中国国民党革命委員会の主席で梁の親友である李済深は賛同の声すら上げていた。梁の発言が本格的に「問題」と化したのは、翌日の一二日に毛沢東が政府委員会会議で行った講話においてであった（九月一七日に至る一連の出来事は全て政府委員会会議において生じた）。

……去年、一昨年に納めた農業税は少し重かった、そこで一部の人たちが語り出した。彼らは「仁政を施す」ことを要求し、まるで彼らが農民の利益を代表しているかのようである。我々はこのような意見に賛同するか？　我々は賛同しない。当時は、あらゆる努力を尽くして抗米援朝（朝鮮戦争）の勝利を勝ち取らなければならなった。農民にとって、全国の人民にとっては、生活がしばらく少々窮屈になっても勝利を勝ち取ることが有利なのか、それとも抗米援朝をせずに、幾らかの金額を使わないことに利があるのか？　当然抗米援朝の勝利こそが彼らを利するのだ。(62)……

名指しをせずに厳しい批判を繰り広げた毛のこの発言に対する参加者の拍手は長かったという。(63)「仁政」という言

葉選びは間違いなく儒学者である梁のことを暗示したものである。毛の考えによれば、「仁政」は主に「小さな仁政」と「大きな仁政」に分けられる。前者は「人民の当面の利益のため」であり、後者は「長い目で見た人民の利益のため」の政治である。朝鮮戦争や重工業の建設は、後者の例であると彼は主張した。それゆえに、「小さな仁政を一方的に強調する」梁は、「朝鮮戦争と、重工業の建設をやめる」よう主張しているに等しく、総路線に反対するものであると毛は考えたのである。同様の考えを持つ文学者の葉聖陶は、後日「今回の梁の発言に悪意がないとしても、客観的にみれば、確かに総路線に反対し、労農同盟を唆して仲たがいさせた疑いがある」[64]という一文を日記に書き込んだ。筆者も毛と葉の批判にはいくらかの正当性があったと考える。梁は後にいかに懺悔の意思を示して総路線への反対の意思は微塵もないと主張したとはいえ、「九天九地」のような問題提起の仕方は、結果的に農民に対する搾取を軸とした経済政策への批判だと理解されたのである。政治志向における梁と共産党との微妙な距離感、および毛沢東の脳裏に画された越えてはならない一線を踏み越えた梁の農民問題への言及こそ、この政治的異変を生み出した二つの根源的要因であろう。

当日の夜、梁は不快な気持ちで筆を走らせ、毛に向けて手紙を書いた。「主席の批判を受け入れることができません。私は総路線に反対しているわけではなく、総路線を擁護しています。主席がこのような場で、あのような言葉を発することは妥当ではありません。私本人が悔しい思いを抱くだけでなく、他人に波及するようになり、誰も指導（する）党に対して真心のこもった言葉を捧げる勇気を持てなくなるのではないでしょうか?」と述べている。梁が一三日に直接手紙を毛に提出すると、毛は当日夜の対談を約束した。誤解を解くことを要求する梁に対し、頑固一徹な毛は、梁が経済建設の総路線に反対する人物であり、自分のことがわかっていないか、あるいは認めていないかだけだと反応した。互いに譲歩しない中で、梁は自身の観点を再び述べるチャンスを探し、公に議論することを要求した[65]。

一四日から一六日までの三日間はあたかも嵐の前の静けさのようだった。ただし、一五日に会場で毛沢東の旧作『抗日（戦争）時期の経済問題と財政問題』が配布され、再び「仁政」が言及された。国家副主席の高崗も会議の最後に工業化の必要性と可能性を再び強調した[66]。クライマックスと言いうる一七日に、先陣を切ったのはまさかの章伯鈞であり、非難の言葉を多く発した。そののちに周は長い演説で「歴史問題」を振り返りながら、厳しい口調で梁は一貫して反動的だと話した。この両者の発言時間は合わせておよそ三時間に及んだという[67]。周の発言内容は糧食部長であった章乃器の日記から窺える。

> 総路線と異なる路線は、区別されなければならない。抗日（戦争）の時に我々が採った、広範な群衆に働きかける路線について、ある者がそれを放棄するべきだと勧告した。ある者は解放戦争の時にも、我々は蔣（介石）と妥協して対話すべきだと考えた。一九四五年一二月に梁漱溟は我々にハルビンを含む地域を譲らせようとした。このような条件のもとで、ニセ国（民）大（会）に参加するよう勧告した。私は当時に梁がエセ君子だと責めた。一九四九年一月に梁は渝（重慶）で文章を発表し、初期は蔣が戦争をしようとしたが、後には共（産党）が戦争しようとしていると言った。「武力統一に反対」という大雑把なスローガン（で）、梁は人民戦争に反対した。その時に蔣はすでに下野するふりをした。これは半封建・半植民地的な思想であり、中国を工業化できないようにさせるものである。……
>
> 梁は封建的思想（の持ち主）である。総路線を擁護しようとするが、うまくできないと恐れたのである。しかし前半分は人を惑わすものだ。実際には、私（梁）の総路線を参照しない限りうまくいかないと言っているのだ。（そして）労農同盟を引き裂こうとしている。第一に、党・政・群（衆）・（共産主義青年）団などの力を認めない。第二に、党が農村を捨て去ったと言い、法律に背き規律を乱していることを強調する。第三に、労働者と農民の生活には、「九天九地」の隔たりの如く大きな格差があると言った[68]。

ここから周恩来という人間の毛沢東に対する追従ぶりを容易に見て取ることができる。周の発言中に毛は何回も言葉を挟んだが、梁にとって最も印象的なものは以下の三つであった。「あなたは良い人だと他の者は皆言うが、私から見ればあなたは似非君子だ。」「あなたは刀で人を殺すのではなく、筆で人を殺すのだ。」「あなたは今回政協委員（の役職）を除名されないだけでなく、次回の政協[69]にも依然として名を連ねる予定だ。なぜだ？　社会において一部の人はまだあなたに惑わされているからだ[70]」。

実に毛沢東らしい冷酷な発言である。さらに毛は、梁が総路線を否定していることを再び強調し、共産党を前にして農民問題について意見を述べる梁は釈迦に説法だと酷評した。休憩時間には、一九四九年二月に梁が発表した「中国共産党に申し上げる」が批判すべき「歴史資料」として配布された。最後の一八日に、梁はわずか一〇分間発言してから、一部の会議参加者に怒鳴られて止めさせられた。その後すぐに挙手による表決で彼の発言権が剝奪され、一方的に批判された[71]。数日間にわたった政府委員会会議でのこの論争の中で、毛の最後の言葉が最も興味深い。

> 彼（梁）の問題は全国的な性質を帯び、薄一波の問題と同じで、全党と全国において討論すべきだ。典型を探し、批判と自己批判（が必要だ）。全国において総路線を討論する。
>
> 批判には二つある。一つは自己批判で、一つは批判だ。梁漱溟あなたに対しては、我々はどちらを実行するのか。自己批判を行うのか。違う。批判だ。
>
> 梁漱溟を批判することは、彼ひとりに対する問題ではない。彼という人物を借りて彼の代表する反動的思想を暴露するのだ。梁漱溟は反動的だが、我々はやはり彼の問題を思想改造の範疇に置く。彼を改造できるかどうかは別の問題だ。おそらく彼を改造することはできないだろう。改造できなくても大丈夫だ、ただこの一人だけだろう！　しかし、彼と弁論することにはメリットがあり、針小棒大で弁論に値しないと思ってはならない。彼と弁論することで問題を明確にすることができる。このことでいか

なるメリットを得られるかというと、それはただ一つのメリットだけある。今弁論しているのは何の問題か？　あくまでも総路線の問題ではないか。この問題をはっきりとさせることは、我々皆にメリットがある。[72]

この段階に至り、ようやく事件の本質があらわになった。以上の論争から浮かび上がるのは、四年後に猛威を振るう反右派闘争の実質的な予行演習が、ここで行われていたことである。事実、反体制狩りの舞台装置および配役はすでに完成していた。具体的にいえば、「舵」を取る毛沢東。必ずしも毛と同じ立場に立たないとはいえ、最終的に毛に忠誠を示す周恩来。一見体制内に取り込まれているものの、実質的に「客卿」のような存在で政権から距離を置く「党外人士」。会議の最後に梁に向かって批判の言葉を投げかける史良や章伯鈞[73]のように、イデオロギーあるいは政治的打算などの理由で共産党に同調するもう一方の「党外人士」である。

舞台上で演じられる脚本もほぼ同一であった。すなわち一九五七年の章乃器がそうされたように、反対者に対し、いわゆる「歴史問題」を公に暴露してから政治的レッテルを貼り付ける。もちろん、この時点では一九五七年のように大がかりに『章乃器反共三十年』を編集して「右派」と決めつけたのではなく、トップの指導者が意図的に梁の「歴史上の問題」を取り上げて「改造不能」という「帽子」を被せたのではあるが。また、百花斉放・百家争鳴運動（以下、双百運動と略記）の時期には及ばないとはいえ、一九五三年の段階では政府レベルにおける政治的発言は比較的自由であった。当時の比較的自由な言論空間への締め付けは、反右派闘争がそうであったように事前に予定されてはいなかった。さらに、双百運動において提起された批判と自己批判との組み合わせ[74]は、一九五三年九月の政府委員会会議における毛の発言を実行に移したものである。当然ながら、両方の事件とも最終的に自己批判はなされず、批判のみ行われたのである。

毛沢東個人についても一九五三年と一九五七年の間に共通点を見出すことができる。一つは実用主義的な態度であ

る。双百運動の際に、彼は知識人による批判を党・政府の官僚主義の克服のためにのみ容認した[75]。一方、一九五三年の彼は、梁に対する批判が「過渡期の総路線」の正統性を打ち固めることに役立つことだけを期待したのである。もう一つは知識人に対する不信感である。梁に対する毛の攻撃には、「蔣介石を助ける」「信頼できない」「エセ愛国主義」などの表現が見られる。このような放言の背後にある第一の原因は、梁が「総路線」という越えてはならない一線を越えたことである。双百運動において、「官僚主義反対」という想定された批判の範囲をはるかに踏み越えることによって、知識人たちが毛の予想をあっさりと裏切ったように、経済政策の基本方針という聖域に踏み込んだ梁は、意図せずして毛に「不意打ち」を食らわせてしまったと考えられる。当時まだ正式に発表されなかった「過渡期の総路線」への挑戦は、いかなる理由があるとしても断じて許されないと毛は考えたのである。第二の原因は、Alitto が指摘したように、たとえ建国以降、毛沢東がすでに思想と政治の絶対的権威になっていたとはいえ、梁との付き合いは長年にわたるうえに、梁の理論について二人の間で議論し合ってきたために、「毛は、この人物と彼の思想を簡単に否定することができなかった」ことである[76]。さらにいえば、中国民主同盟の政治的影響力の源泉は政党そのものにあったのではなく、構成員個々人の社会的地位にあった。そのため毛は、既存の権威をより強固なものにするためにも、この影響力ある人物を圧倒しなければならないと認識し、最終的に勝利したのであった[77]。加えて、あくまで推測ではあるが、この真正面からの衝突によって、毛はある収穫物を得ることができた。それは「人々にいいたい放題いわせれば、極端な意見の持ち主がわかる」[78]という双百運動で生かされた「経験」のみならず、雲行きが怪しい時に事態を収拾する政治的手腕であった。

最後に、この出来事は民盟にとっていかなるものだったと理解すべきだろうか。『盟訊』は「過渡期の総路線」の参考資料として、李維漢の「中華全国商工業連合会会員代表大会における講話」や五つの『人民日報』社説を掲載したのみならず、「国家の過渡時期の総路線を必ず真剣に学習する」という力強いタイトルの論評を掲載した。

国家の過渡期の総路線は我々の各々の仕事を照らす灯台であり、本盟の仕事を照らす灯台であり、それから離れれば、我々は右傾あるいは「左」傾の過ちを犯すようになる。したがって、総路線に基づいて我々の仕事を推し進めるために、その第一歩は、真剣に、体系的に、全面的に、踏み込んで総路線を学習することである。……総路線にはいくつかの言葉しかないとはいえ、それは我々の各々の仕事を照らす灯台であり、理論から実際まで、あらゆる方面を包括し、各階級・階層の人々皆と密接な関係を持っている。その内容は極めて豊富であり、奥深い。我々が力を込めて学習しようとしても、短時間ではうまく学習することはできず、さらに今後の仕事において絶えず体得し、学習しなければならない。……まして、国家の過渡時期の社会主義改造においては、経済改造だけでなく、思想改造も含まれており、総路線を学習すること自体が思想改造の過程である。(79)

指導部の決定に対するかくも過剰な賛美は、政党としての過剰同調を意味する。この論評において梁に対する批判は見当たらないが、梁の政策批判の試みの失敗を示すには十分であった。経済政策の分野にとどまらず思想改造にまで言及するのは、あたかも角を矯めて牛を殺すようなものだったと言わざるを得ない。この段階において、民盟に対する中共の従来の「指導権」は、実質的に「指導」そのものに変わってしまったのである。政治的思考の独立性という最後の陣地を放棄するのは、全体主義的な政治的空間への従属にほかならない。

一方、章伯鈞や史良、さらに千家駒などは民盟のメンバーとして批判の急先鋒となった。彼らとは対照的に、会議のメインテーブルに座りながら、終始沈黙を保ち続けたのは張瀾であった。張は梁の人柄をよく理解しており、彼に対する批判の大波に流されていなかった。張は会議後に李済深と連名で毛へ書簡を送り、事態の沈静化を図った。(80)「九天九地」の発言は民盟内部の分断の傾向を顕在化させたとはいえ、張瀾の存在によって本格的な分断にまで至ることなく収束した。しかし、張が一九五五年に死去するとこのような抑止力は消失し、反右派闘争においては民盟の激しい分断が起こることとなった。このような民盟内部の環境の変化こそ、一九五三年の衝突がもたらした第一の影

響である。

第二に、双百運動までの時期において、農業問題をはじめ、民盟が共産党に対して異議を提起する能力は完全に封印された（双百運動においてこの能力はごく一時的に復活した）。翌年に民盟総部学習委員会が編集した『農民問題に関する学習資料』は梁の敗退を象徴し、暫時中央政府の公式的立場に同調するようになった。この資料の中の農民の特性や労農同盟問題を論じた多くの章は大量にボリシェヴィキの文献、特にレーニンとスターリンの言説を引用することで当局の立場を補強しようとしている。とりわけ注目すべきは、「スターリンが商人と富農に反対することを目標とする労農同盟を論ず」という一節における以下の記述である。

> レーニン同志は我々と永訣した時に言い含めました。力を尽くして労農同盟を固めるのだ、と。レーニン同志よ！　謹んであなたに宣誓します：あなたのこの遺言を、必ず実現することはわれわれの栄誉です！（傍点原文）[81]

続いて「工業と農業の関係が破裂する危険を避けるため、必ず先に工業を改造し、次に農業を改造する――スターリンが都市・農村の結合の新たな形式を破壊するブハーリングループによる詭計を駁する」という文章は、「（ソ連共産）党の計画」は「我が国の工業の発展の速度を上げることが、農業改造事業の鍵である」とする一方、「ブハーリンの計画」は「単独経営農民経済を発展させることが、農業改造事業の鍵である」としていると結論づけた。このような比較から「ブハーリンの計画は工業の発展速度を下げ、都市・農村の結合の新たな形式を破壊する計画である」[82]（傍点原文）と主張している。これらの主張から見れば、民盟の学習委員会は梁の発言を意識しながら資料を編集したとしか考えられず、上述した毛沢東の勝利もここから窺うことができるであろう。

第三に、最も重要な意義として、民盟が無意識的に毛沢東を幇助して、後に起こる反右派闘争の大枠を作り上げて

しまったことが挙げられる。それは上述の内容にとどまらず、民盟の一部のメンバーがより左傾的なメンバーに批判されて見捨てられる構図が出来上がってしまったからである。被害者としての民盟が自ら墓穴を掘り、辛うじて維持してきた政党としての独立性を知らず知らずのうちに葬り去ったのはこのうえない皮肉であった。一九五三年の章伯鈞は政治的正統性をもって梁漱溟の頭を押さえ付けたが、一九五七年に同様の手法であっさりと史良に裏切られ――このような仕打ちは彼自身まったく想定していなかったであろう――無慈悲にも政治的な死を宣告されたのである。

五　終　章

本研究は、冒頭に掲げた三つの問題に対し、それぞれ史実を参照しながら、以下のような回答を与えようと思う。第一に、近現代中国において、政治団体が近代的な政党として根を下ろすのは非常に困難であった。当時の民盟は言うまでもなく近代的政党ではなく、あくまでも徒党の様態にとどまっていた。その本質は、私人的な関係に強く依存する、近代的政党以前の政治グループであった。このような政党が、政権の中心に立つ中共に対して有効な抵抗を展開することができず、中共に飲み込まれてしまうことはごく自然の結果であった。全体主義的政権の成立過程において、健全な市民社会の存在は許容されないという論理と同様に、執政党以外に健全な組織を持つ政党を容認することはありえなかった。逆説的であるが、中国においては、民盟のように「参政党」として、健全な組織を持たないことこそが生存のための絶対条件であった。その一方で、民盟組織の非健全性は、中共に対する上層部のすり寄りと下層部の超然主義という対照から見出すことができる。この「下からの離反」からみて、一九五三年の中国は全体主義「体制」が成立したのではなく、全体主義的「政権」が成立したという表現にとどまるであろう。

第二に、知識分子思想改造運動は、「参政党」と全体主義的政権の成立過程との関係性をさらに具現化させた。支

配政党による高圧的な政治運動の標的とされながら、民盟は抵抗を試みたどころか、顕著な同調的姿勢をもって政治運動を推し進めた。そのうえ、支配政党の政治的言説を用いて政治運動を正当化しようとし、一種の過剰同調の現象が生じた。とはいえ、歴史の当事者から見ると、この同調こそが最善の生存戦略になるかもしれなかったのである。問題なのは、独立性を有する生存をいかに獲得するかという点であった。この知識人政党は支配政党の政治的言説の原理的解釈により、保護膜を構築することを戦略としたのである。

第三に、梁漱溟と毛沢東との対立は、より長い時間的スパンでいかに理解すべきかという論点について述べておこうと思う。この対立を分析することにより、反右派闘争に対する認識を修正することができる。反右派闘争について高橋伸夫は、一九五五年から一九五九年まで続いた反革命粛清運動が重要な背景だと認識する。そして、双百運動はこの大規模粛清からの一時的な「逸脱」であり、反右派闘争はそれに伴う「回帰」であり、結果的に粛清を加速したと考えている[33]。本研究はこの解釈をさらに発展させるものである。すなわち、筆者は「逸脱―回帰」モデルは妥当である一方で、「回帰」する点は一九五七年に設定されたのではなく、その軌道が一九五三年の時点で既に設定されていたと主張するものである。「回帰」とは、梁に対して反体制狩りを行った政治的手段を指すだけでなく、アクターの立ち位置・特性、民盟への影響についての類似性も内包した概念である。

本研究の一般化された結論は以下の通りである。全体主義的政権の成立段階において、少数派政党の生存戦略は支配政党に対する抵抗ではなく、主に政治的圧力に順応して同調を選択することである。同調の代償として、少数派政党のアイデンティティの希薄化から生じる組織の独立性に対する持続的な脅威が存在する。この脅威を解消するために、支配政党の政治的言説に対して独自の解釈を行い、その時代的文脈におけるポリティカル・コレクトネスに基づき自己正当化を行おうとする。ただし、政治的・物理的暴力を内包する全体主義において、この戦略の無力さはいとも簡単に暴露されてしまった。民盟のような立会人の視点からみる全体主義およびその形成の特徴は、独立性を維持

するために、少数派政党は限定的な政党組織をもって、無抵抗で全体主義の政治的動員に従属しつつ、当該政治体制の政治的真理――すなわち絶対的な政治理論――を積極的に運用することである。しかし、独立性の維持と、独立の主体を容認しがたい全体主義の特質とは根本的な矛盾を内包しており、この矛盾こそが支配政党と少数派政党との力学的関係だと理解できるのである。

他方、中国民主同盟に関しては多くの課題が残されている。まず、一九四九年から一九五三年にかけて、とりわけ知識人にまつわる政治運動や事件については、資料の不足によって同時期の民盟に関する論点を網羅的に検討できたとはいえない。また、一九五四年以後の時期、特に反右派闘争における民盟の実態を明らかにするという最も重要なテーマはいまだに手が付けられていない。これらの課題は今後の研究に譲ることとする。

（1）世界大百科事典、「中国民主同盟」の項目を参照。

（2）詳しくは、平野正著『中国民主同盟の研究』（東京：研文出版、一九八三・一二）を参照。

（3）平野正「中国民主同盟についての断章」『西南学院大学国際文化論集』7(2)、一九九三・二、一五頁。

（4）黄薬眠によると、「当時（一九四七年末、筆者注）において、民主同盟はほぼすでに全部崩壊し、中央の下に多数の総支部は、実際にすべて存在しなくなっており、ただ香港に設けられた南方総支部が存在するだけであった。そのため、南方総支部は民主同盟にとって、特に重要であった（以下略）」。よって、南方総支部の政治的地位に鑑みて、その出版物は民盟の見解を代表することができる。
蔡徹編、黄薬眠口述『黄薬眠口述自伝』（中国社会科学出版社、二〇〇三・四）五四三―五四四頁。

（5）James D. Seymour, *China's Satellite Parties*, Armonk, N. Y. : M. E. Sharpe, c1987, pp. 26-27.

（6）他に、馬叙倫も中国民主促進会の創始者の一人である。
儲安平は九三学社に属するが、一九五七年四月に民盟の機関紙『光明日報』の編集長に就任したため、その時点で実質的に民盟のメンバーになったと考えられる。

（7）J．R．タウンゼント著、小島朋之訳『現代中国　政治体系の比較分析』（東京：慶應通信、一九八〇・六）二四頁。分類に関する詳細は、Gabriel Almond & G. Bingham Powell, Jr., *Comparative Politics: A Developmental Approach*, Boston: Little, Brown, 1966 を参照。
（8）同右、一七七―一七八頁。
（9）同右、一七八―一七九頁。
（10）中国民主同盟中央委員会編『中国民主同盟史（民盟歴史文献）』（北京：群言出版社、二〇一二・一〇）八六頁。
（11）このような政治参加の制限は、儲安平の毛沢東と周恩来に向けられた質問によく表れている。儲安平「向毛主席和周総理提些意見」（『人民日報』、一九五七年六月二日）を参照。
（12）前掲『中国民主同盟史（民盟歴史文献）』一一一―一一五を参照。
（13）光明出版社編『中國民主同盟的性質與任務』（光明出版社、一九五〇・一一）。
（14）前掲「中国民主同盟についての断章」一五四頁。
（15）平野正著『中国民主化運動の歩み：「党の指導」に抗して』（東京：汲古書院、二〇〇三・一〇）二一五―二一六頁。
（16）同右
（17）前掲「中国民主同盟についての断章」四一三頁。
（18）イメージとして、単一国家における地方自治の実態を想像していただきたい。
（19）葉篤義著『雖九死其猶未悔』（北京：群言出版社、二〇一四・四）八七頁。
（20）中共中央統一戦線工作部・中国共産党中央文献研究室編『周恩来統一戦線文選』（人民出版社、一九八四・一二）一五五―一五六頁。
（21）章立凡「〝反右〟与中国民主党派的改造」、章詒和編『五十年無祭而祭』（Thinker Publishing、2007.9）一三三頁。
（22）史良著『史良自述』（北京：中国文史出版社、一九八七）七五：その他、沈譜・沈人驊編著『沈鈞儒年譜（民盟歴史文献）』（北京：群言出版社、二〇一三・九）三二五―三二六頁を参照。
（23）ちなみに、盟の四中全会の前後に、盟内の団結について周恩来は中南海で民盟の指導層メンバーと会談を行い、少なくとも一一月二三日・一二月五日・一二月一五日の三回に及んだ。特に、一二月一五日の回は羅隆基と張東蓀の要請によって行われたが、直前になって二人は欠席することを決めた。そこで周恩来は激怒して二人を出席させ、会談は翌日の明け方まで

続いた。

（24）中国民主同盟文史委員会編『我与民盟：中国民主同盟成立50周年紀念文集』（北京：群言出版社、一九九一）五頁。

（25）一九四八年から一九四九年に解放軍が上海を占領した期間、中共とアメリカとの間の橋になるべきだという考えに基づき、羅隆基や葉篤義などの盟員は南京の米国大使館と上海の米国領事館と頻繁に連絡を取り合っていた。詳細について、中国人民政治協商会議全国委員会文史資料研究委員会編『文史資料選輯・増刊第二輯（専著）』（北京：中国文史出版社、一九八七）二五―三〇頁。

（26）「中国民主同盟盟務研討総結報告」、中国民主同盟中央文史委員会編『中国民主同盟歴史文献：1949―1988』（北京：文物出版社、一九九一・三）四四頁。

（27）前掲『雖九死其猶未悔』八七―八九頁。

（28）菊池貴晴著『中国第三勢力史論：中国革命における第三勢力の総合的研究』（東京：汲古書院、一九八七・一二）に参照。

（29）前掲『雖九死其猶未悔』九一―九二頁。

（30）中国民主同盟総部編『盟訊』第二号（一九五〇年八月）八―一〇頁。

（31）高橋伸夫著『党と農民：中国農民革命の再検討』（東京：研文出版、二〇〇六・一二）を参照。

（32）前掲『周恩来統一戦線文選』一五五頁。

（33）前掲『中國民主同盟的性質與任務』。

（34）前掲「中国民主同盟盟務研討総結報告」『中国民主同盟歴史文献：1949―1988』四〇頁。

（35）前掲『周恩来統一戦線文選』一五五頁。

（36）中国民主同盟総部編『盟訊』第一号（一九五〇年七月二五日）三頁。

（37）「中国民主同盟関於執行中共中央『有関各民主党派組織活動的決議』通告」、前掲『中国民主同盟歴史文献：1949―1988』一二二―一二三頁。

（38）前掲『中国民主同盟史（民盟歴史文献）』九五―九六頁。

（39）「中国民主同盟発布関於転向中上層発展組織工作的指示」、前掲『中国民主同盟歴史文献：1949―1988』二九八―三〇一頁。

（40）中国民主同盟総部編『盟訊』（一九五三年九月）五―七頁。

(41) 民盟重慶市支部臨時工作委員会編『重慶盟訊』（一九五一年一二月）九―一〇頁。
(42) 中国民主同盟北京市支部編『北京盟訊』（一九五三年六月一五日）六―七頁。
(43) 前掲『中国民主同盟史（民盟歴史文献）』九四頁。
(44) 中国民主同盟総部編『盟訊』（一九五三年八月）四頁。
(45) 中国民主同盟総部編『盟訊』（一九五三年九月）四―五頁。
(46) 費孝通著『費孝通文集（第六巻）』（北京：群言出版社、一九九九・一〇）一一四―一二〇頁。
(47) 日本語訳は、東方書店出版部訳、ソ連共産党（ボリシェビキ）中央委員会特別委員会編『ソ連共産党（ボリシェビキ）歴史小教程』（東方書店、一九七一・六）一九一頁を参照。
(48) 銭理群著『毛澤東時代和後毛澤東時代（1949―2009）――另一種歴史書寫（上）』（台北市：聯經、二〇一二・一）一七頁。
(49) 中國民主同盟南方總支部宣傳委員會編『知識分子的思想改造問題』（人間書屋、一九五二・四）一四頁。
(50) 同右、二五頁。
(51) 同右、三四―三五頁。
(52) 同右、三七頁。
(53) 梁漱溟「両年来我有了那（哪）些転変」『光明日報』一九五一年一〇月五日。
(54) Guy. S. Alitto (1979), *The last Confucian : Liang Shu-ming and the Chinese dilemma of modernity*, Berkeley : University of California Press, p. 323.
(55) 梁漱溟、『進歩日報』（北京）一九五〇年一〇月一日。
(56) 梁の日記から、一九五三年二月二五日から一九五五年末まで持続的にロシア語学習が続いたと見られる。
(57) 千家駒「評梁漱溟先生〝両年来我有了那（哪）些転変〟」『光明日報』一九五一年一二月一〇日。
(58) 梁漱溟「敬答賜教的幾位先生」『光明日報』一九五二年一月一〇日。
(59) 汪東林著『梁漱溟問答録』（湖南人民出版社、一九八八・四）一二七頁。
(60) 梁漱溟「一九五三年九月一一日政協拡大会議上的発言草稿」『梁漱溟全集（第七巻）』（山東人民出版社、第二版、二〇〇五・五）三頁。括弧内は、筆者による中国語原文に基づく言葉の補足である。

(61) 葉聖陶著『葉聖陶集』第二三巻（南京：江蘇教育出版社、二〇〇四・一一）、二五―二六頁。
(62) 毛沢東「抗美援朝的偉大勝利和今後的任務」『毛沢東全集』第五巻（人民出版社、第一版、一九七七・四）
(63) 前掲『葉聖陶集』第二三巻、二七頁。
(64) 前掲『葉聖陶集』第二三巻、三〇頁。
(65) 前掲『梁漱溟問答録』、一三三―一三四頁。
(66) 前掲『葉聖陶集』第二三巻、二八頁。
(67) 前掲『葉聖陶集』第二三巻、二九頁。
(68) 章乃器の一九五三年九月一七日の日記より。章立凡編『往事未付紅塵』（陝西師範大学出版社、二〇〇四・九）、八六―八七を参照。
(69) 一九五四年のことを指す。
(70) 「一九五三年九月八日至一八日一段時間内的事情」前掲『梁漱溟全集』第七巻、一二頁。
以上の言葉は、『毛沢東全集』第五巻及び『梁漱溟問答録』にも記載があるが、表現には相違がある。『梁漱溟全集』第七巻は比較的即時性を持つため、本論文では同文献をよりどころとする。
(71) 前掲『葉聖陶集』第二三巻、三〇頁。
(72) 毛沢東「批判梁漱溟的反動思想」、前掲『毛沢東全集』第五巻。
(73) 前掲『梁漱溟全集』第七巻、一三頁。
(74) 高橋伸夫著『中国共産党の歴史』（東京：慶應義塾大学出版会、二〇二一・七）一六一頁。
(75) 同右、一五九頁。
(76) Alitto, *op. cit.*, p. 322.
(77) 「在中国人民政治協商会議第二届全国委員会第二次全体会議上的発言　梁漱溟的発言」『人民日報』一九五六年二月八日。
(78) 前掲『中国共産党の歴史』一六一頁。
(79) 中国民主同盟総部編『盟訊』（一九五三年一〇月号）一頁。
(80) 汪東林『梁漱溟与毛沢東』（吉林人民出版社、一九八九年五月）三四―三六頁。
(81) 中国民主同盟総部学習委員会編『関於農民問題的学習資料（専著）』（中国民主同盟総部学習委員会、一九五四・一二）二

五頁。
（82）同右、六四―六五頁。
（83）前掲『中国共産党の歴史』一五二頁。

蒲　柢華（ホ　テイカ）
所属・現職　慶應義塾大学大学院法学研究科前期博士課程
最終学歴　慶應義塾大学法学部政治学科卒、法学士
所属学会　なし
専攻領域　現代中国政治史
主要著作　論文「革命と国際法――中華人民共和国：１９４９年～１９６６年」（未発表）